

第3回日本国際保健医療学会総会

第3回日本国際保健医療学会総会が昭和63年7月16日と17日に開催された。7月17日は午後1時から午後4時30分まで「世界の人口問題を考える」という題のシンポジウムが行われ、埼玉県立衛生短期大学長村松稔博士の司会で、シンポジスト 人口問題研究所長河野穉果、フィリピン人口問題研究所教授 Mercedes B. Concepcion 博士、元NHK解説委員 長岡昌氏、国立病院医療センター国際協力部長我妻堯博士からそれぞれ報告・討論があった。
(河野穉果記)

日本統計学会第56回大会

日本統計学会の昭和63年度(第56回)総会および研究報告会は、7月25日(月)から27日(水)までの3日間にわたり、福島大学経済学部(福島市松川町)において開催された。

本年度の研究報告会では、例年設けられていた「人口統計」の部会はなく、「計量生物」の部会で次のような報告が行われた。

5. Gompertz 則の1つの老年学的意味……………冨家 孝(大阪公衆衛生研究所)
6. 年齢別死亡率曲線が記録した事件……………大久保正一(日本大学・人口研究所)
7. J.S.SüßmilchとL.A.J.Queteletとの学問的つながり
 についての批判的研究(その2)……………飯淵康雄(琉球大医・医学部)
(廣嶋清志記)

日本老年社会科学会第30回大会

日本老年社会科学会(会長:那須宗一淑徳大学長)の昭和63年度第30回大会は、9月16・17日の両日、仏教大(京都市)において開催された。老年社会科学に対する関心の高まりを反映して、本大会の研究報告は96件の多きにのぼり、多角的な研究の発展と活発な討論がなされた。

本大会は学会創設30周年にあたるころから、とくに水谷幸正仏教大大学長の「生きる」と題する記念講演のあと、那須会長が「学会30年を迎えて」と題して学会30年の回顧と展望を行い、高齢化がますます進むなかで、老年科学に関する学際的な研究を一層発展させることが急務であることを強調された。

また本大会では、きたるべき超高齢化社会に備えるには、思いきった発想の転換と学際的アプローチが必要であるという立場から、社会学、社会福祉学、経済理論、財政学等の見地から、「21世紀にむけての老年社会科学の課題と展望——思想として、科学として、政策として、技術として——」をテーマにシンポジウムが行われた。このなかで、人類初めての経験ともいえる「晩期老人」型の高齢化に対して、社会や家族がどう対応し、いかなる政策がとられるべきか、逆に「政策」がどこまで対応しうるかなどの非常に重い問題について活発な意見の応酬がなされた。

人口研究の観点から興味深いものとして、次のような報告があった(プログラム順)。

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 学校教育における「エイジング教育」のカリキュラム開発に関する研究 | 谷口幸一(鹿屋体育大学) |
| 沖縄の長寿文化について | 片多 順(福岡大学) |
| 所得源泉の転位からみた高齢者世帯群の実態的考察 | 前田正久(日本体育大学) |
| 高齢者問題の日中比較——東京と上海の比較調査研究(1) | 清水浩昭(人口問題研究所) |

高齢者問題の日中比較——東京と上海の比較調査研究(2)
「夫婦の一生」の変化——戦前と現代との比較

冷水 豊 (東京都老人総合研究所)
中野英子 (人口問題研究所)

(中野英子記)

第47回日本公衆衛生学会総会

日本公衆衛生学会総会が、札幌において1988年9月20日から22日まで開催された。その規模を演題数でみると、講演が11、シンポジウムが5、口演が470、示説が400とかなり大きなものであった。その中でも特に人口学に関連するものとしては、まず、シンポジウム「公衆衛生における情報の役割」で、古市厚生省統計情報部長から「行政の立場から——統計情報の利用と個人情報の保護——」と題する講演があった。同講演では、(1)情報公開の原則から、情報の扱いと今後の方針 (2)保健所における情報利用の現状と将来展望について統計に関係した法律の改正の要点や、統計データの民間への供給について説明があった。一般口演の中では、30題ほど関係があり、そのうちの主要な題名をあげると、

- ・死亡状況変化に関するいくつかの仮定による日本の将来人口の一推計
- ・零歳平均余命延長における年齢階級別死亡確率改善の寄与——延長速度による比較
- ・マルコフモデルにおける測定誤差を考慮した推移確率の推定
- ・比例ハザードモデルより計算されたハザード比とロジスティックモデルによる相対危険率の比較検討
- ・わが国の2000年の疾病構造
- ・最近のわが国の平均余命の動向について
- ・都道府県別総死亡のコホート分析
- ・生命表の国際比較(1)平均余命の検討
- ・世代生命表と結婚年齢

となる。また、示説では、

- ・メッシュ区分法によるがん死亡の地理疫学
- ・生命表による胃癌死亡状況の分析(1)
- ・複合死因からみた近年の死因構造に関する研究
- ・Contour Maps Approachによる主要死因死亡の解析
- ・中国の出生率・死亡率水準の現状および人口の将来推計

等があげられよう。

これからわかるように、本学会における人口学関連の発表は死亡に関するものと疫学に関わるものが多い。

なお、来年の総会は、10月25日から27日までつくば市において開催される予定である。(大場 保記)

シンポジウム「『人口と環境』を考える」

標記のシンポジウムが、人口問題協議会・家族計画国際協力財団(ジョイセフ)主催、国連人口基金(UNFPA)後援で、昭和63年7月14日(木)午後1時45分から午後5時20分まで東京都千代田区内幸町日本プレスセンターホールにて開催された。大来佐武郎氏の基調講演のあと、長岡昌前NHK解説委員司会のもとで、パネルディスカッション「『人口と環境』を考える」が行われた。パネリストはアルファベット順で石弘之朝日新聞編集委員、黒田俊夫日本大学人口研究所名誉所長、河野稠果人口問題研究所長、橋本道夫元環境庁大気保全局長の4名であった。人口問題研究所長は人口の観点から報告を行った。(河野稠果記)